

## 大学生の「生徒化」論における批判的考察

新立 慶

はじめに

本稿の目的は近年大学生の特徴を表す新たな概念の一つである「生徒化」という特徴を批判的に考察することにある。1980年代においては授業に出ず、アルバイトやサークル、異性交遊に明け暮れる大学生達の姿を指して「大学のレジャーランド化」といった表現がなされていた<sup>1)</sup>。しかし、90年代に以降になると大学の授業出席率は急上昇し同時に大学生の学生生活における勉強の位置づけも徐々に高くなってきている<sup>2)</sup>。このように、近年の学生達の状況が変わっていく中で、新たな学生のタイプを示す言葉の一つとして「生徒化」という言葉が使われるようになった。この「生徒化」という言葉は社会学やキャリア教育等の研究者達<sup>3)</sup>を中心に使われるようになり、言葉としてある程度定着し始めていると言える。「生徒化」はどちらかといえば学生の「未熟化」や「幼稚化」といった「ネガティブなイメージ」を持つ言葉として使われている傾向にある<sup>4)</sup>。しかし、現代の社会の学生を取り巻く社会状況や学生そのものも非常に複雑化している<sup>5)</sup>。そのため、「生徒化」を単なるネガティブなイメージとして捉えるだけでなく、違った視点からの見ていく必要があると考えられる。そこで、本稿では「生徒化」がどのように論じられているかを先行研究の検討を通して、今一度検討していきたい。

具体的な方法としては、まず最初に「生徒化」という言葉が用いられていた中等教育段階での定義を示し、その「生徒化」の定義がどのように大学生に用いられるようになったのか、その導入過程を述べる。次に、大学生の「生徒化」に関してどのような議論が行われているのか、先行研究を整理する。そして、「生徒化」議論の社会的背景及び青年論の中で現代の学生像がどのように捉えられているのかを整理する。これらの作業を通して、現在の「生徒化」論の持つ問題点を考察する。

### 1. 先行研究に関する「生徒化」の定義

#### 1) 大学生への「生徒化」の適応過程

##### ①中等教育段階における「生徒化」の定義

生徒化という言葉は岩見・富田が中等教育段階の子ども達の一側面を捉えた言葉として使用している<sup>6)</sup>。学校は子ども達の発達過程を少しでも可視化するために、大人としての心理的・社会的な成熟条件を定め、それに到達することを目的とした教育課程を定めた。すると、「生徒」という存在は「大人」との対比の中で、未熟な存在として扱われ、学校側は子ども達を未熟な「学ばなければならない」存在として扱おうとする。このような、学校側の圧力を岩見・富田は「生徒化」圧力と定義している<sup>7)</sup>。一方、それに対して「中学校」の段階に位置づけられた子ども達はその圧力に

対して、反発をしながらも「生徒的役割」を遂行しようとする<sup>8)</sup>。これが、子どもの「生徒化」という概念である。つまり、「生徒化」とは学校側が子ども達を中学校段階の生徒として適した態度と能力を持つ「模範的な生徒」として扱おうとする動きと子ども達が自律他律問わず最終的に「模範的な生徒」を目指すようになるという二つの側面からの働きがあると定義されている。

## ②大学生への「生徒化」の適応

この「生徒化」という概念を近年の大学生の特徴から当てはめたのが伊藤である<sup>9)</sup>。伊藤は近年の大学生の学生生活や授業態度等<sup>10)</sup>から、近年の大学生の特徴に上記の岩見・富田が示した「自分を学ばなければならない」存在と捉える未熟性や「学校のカリキュラムに乗り、その中で「生徒としての役割」を遂行しようとする」他律性の特徴があると指摘している。さらに、伊藤は大学が行う懇切丁寧なガイダンスやカウンセリング、クラス単位での指導等から学校側も大学生を「生徒」として扱っていることを指摘している<sup>11)</sup>。このように、伊藤は近年の学校側の側面と大学生側の二つの側面から近年の大学生に対して「生徒化」という言葉を適用したのである。ただし、中学生における「生徒化」では、「生徒化」した子どもはいわゆる模範的な生徒として扱われているが、大学生においては必ずしもそうでは無い。

## 2) 「生徒化」した学生に対する議論

### ①否定的な見解

「生徒化」した大学生についてどのような議論がなされているか、主要な先行研究者達の意見を取り上げながら整理していきたい。まず、大学生の「生徒化」を学生文化、若者文化の観点から捉えた研究として武内の研究が挙げられる。武内は大学生の学生文化を高校生の生徒文化と比較した際、生徒文化の延長としての側面がある一方で、大学生の文化は高校生に比べて非常に広範な広がりを持ち深さを持つことを指摘している<sup>12)</sup>。しかし、大学が「生徒化」すると大学生の生活は大学の設定するカリキュラムの中に組み込まれていくようになるため、大学生活における自由な時間が無くなり、そのような文化的広がりが減少してしまい<sup>13)</sup>。さらに、学生の文化には遊戯性や対抗性、特異性等の特質を持っているが、学生が「生徒化」しそれらのカリキュラムに従順になることでそのようなものも失われることも指摘している<sup>14)</sup>。そして、大学からそれらが無くなってしまった場合、大学が学生の自立性を養う場としての機能が失われてしまうと危惧している<sup>15)</sup>。

次に大学生の授業への適応という観点から取り上げた研究として半澤の研究が挙げられる。半澤は量的調査によるデータから、「生徒化」した学生は大学の授業において学校側が綿密なカリキュラムを提供することを望むようになる傾向が強いと示している<sup>16)</sup>。しかし、大学においての学問というのは学校側が与えるものではなく自らが学んで獲得していくものであるという認識が強い。そのため、実践的かつ即効性のある知識を望む「生徒化」した学生と「主体的な学び」を求める大学の間に学業におけるミスマッチを生み出すことになり、このミスマッチが大学生の学習意欲の低下を引き起こしていると論じている<sup>17)</sup>。

### ②否定的な見解

しかし、「生徒化」した大学生に対して全てを否定的にみなすのでは無く、希望的に捉えている考え方も存在している。例えば、葛城は、「Fランク」<sup>18)</sup>の大学生は学習に対してある程度の肯定的な認識を持っていてもそれを学習につなげることが出来ないため、自律的な学習が困難であると指摘している<sup>19)</sup>。そのため、それらを身につけることが出来れば自律的な学習習慣が可能であると指摘している。これらのことは、各大学の大学GP<sup>20)</sup>や初年次教育においても言われていることである。

### 3) 大学生の「生徒化」の背景

この「生徒化」という学生の新たなタイプを生み出した背景について考えていきたい。まず、考えられる可能性としては大学が大衆化し進学率が向上していく中で、今までは大学に進学することが無かったタイプの学生が、大学に進学するようになりそれが「生徒化」した学生という可能性である。武内・谷田川・伊藤は「新興大学」<sup>21)</sup>の学生の特徴として「大学生活において勉強を重視している」「実践的な知識を求めている」等「生徒化」した学生に見られる特徴といくつか共通する点があると指摘している<sup>22)</sup>。これらの学生の多くは従来大学に進学するはずの無い層であったが、大学が大衆化することによりこれらの学生が進学するようになった。つまり、大学が大衆化することで「生徒化」タイプの学生大学に進学するようになった可能性が考えられる。

そして、大学が学生の「生徒化」を促進要因として挙げられるのが大学の「学校化」である。大学の本来の目的としては社会に出ていくための必要な知識を身につけていく場、つまり青少年である学生を社会化するための場として捉えられてきた。しかし、張江・浜島は社会の近代化が進んでいく中で社会と学校の一関係が逆転した状態になっていったことを指摘している<sup>23)</sup>。大学は近代化していく中で大衆化した学生達に対応していくため、綿密なカリキュラムやサポートを組むようになる、すると学生たちや社会にとって学校というのは社会に出ていくための必要な知識や技能の全ての獲得出来る場として考えられていくようになる。そうすると、大学は社会化を助ける場としてではなく、「学校化」された良い大学に行くことが人生の全てとなっていく。そして、その学校化された大学の中で学生たちにとって必要なことは主体的に行動することでは無く、大学が敷いたレールの上に乗る、その大学にうまく適応していくことが求められるようになる。こうして、高校から大学に進学した生徒達は「学生化」することなく「生徒化」していくことが考えられる。

## 2. 「生徒化」論の問題点

### 1) 「生徒」の上位概念としての「学生」

先行研究において「生徒化」した学生達に対して様々な議論が展開されてきたが、これらの議論に関しての問題点を従来の学生論を踏まえた上で、論じていきたい。

まず、先行研究の議論に関しての問題点を見ていくために、先行研究で言われている「生徒」と「学生」という言葉について検討する。日本では「学生」という言葉を使う時は基本的に大学生を指し

<sup>24)</sup>、中学生や高校生に対しては「生徒」という呼び方が一般的である。そのため、発達段階では少年期段階の「生徒」より青年期段階の「学生」という呼び方の方が上位になると考えられる。さらに近年の大学生を「生徒化」と呼び始めた伊藤が考える「学生」の概念として①大人としての準備段階、②エリート予備軍、③対抗文化の担い手、④大学に対して依存をしない存在、⑤自律的な存在等が挙げられる<sup>25)</sup>。つまり、「生徒化」した学生というのは、上記に挙げられているような「学生」としての条件を満たしていないような大学生を指し示すための言葉として使われていると考えられている。上記の先行研究における「生徒化」に対しての肯定・否定の両者の議論においてもこのような前提があると考えられる。しかし、伊藤が前提としている「学生」像はあくまで「現在の大学生」ではなく「かつての大学生」が基準になっていることを浜島は指摘している<sup>26)</sup>。つまり、「生徒化」した大学生というのは未熟な学生として捉えているが、それは「かつての大学生」という基準からみた場合においてであり「現在の大学生の基準」において、それは必ずしも一致するとは限らないということである。それでは、何故現在の大学生が未熟な学生としての「生徒」と捉えられているのか従来の学生像の背景を踏まえて考えていく。

## 2) 従来の学生像

従来の学生像を溝上がまとめた年度別の学生像を中心に見ていく<sup>27)</sup>。

まず、戦前の旧帝国大学時代の学生から見ていく。旧帝国時代の学生は一般的にエリート段階の学生は一般的にエリート段階であり、伊藤の言う「学生」としての条件を満たしている大学生と考えられる。しかし、潮木は、旧帝国大学の時代、ただ授業に出席し真面目にノートを写すだけであった東京帝国大学の学生に対して批判を行っていた<sup>28)</sup>。そのため、必ずしもすべての旧帝国時代の学生が主体的に勉強を行っていた訳ではない可能性がある。

1950年代になると駆弁大学という言葉が使われ始め旧来の「大学＝帝国大学」というイメージが無くなり始めていた。このあたりからで大学生の学力低下等が指摘されるようになり、大学生のエリートのイメージは若干薄れていくようになった。その反面1960年代になると学生運動が増しいき、大学生の大人の社会に対する対抗性という側面が強く意識されるようになってきた。しかし、この時代においても大半はごく普通の真面目な学生であることが指摘されている<sup>29)</sup>。

1970年代になると学生運動が衰退していき、大学生の対抗性が薄れていくが、1980年代になると大学生の対抗性は若者文化の中で次第に強まっていくようになる。そこでは、エネルギッシュな若者像があるが、一方で、共通一次試験による画一的な若者の台頭といった主体性に欠けた若者像もある。

このように、従来の大学生像を見ていった場合においても、必ずしも伊藤の示した「学生」の構成概念に当てはまらない場合もあることが分かる。それでは、現在の学生と従来の学生においてどのような点において大きく異なるのだろうか。

### 3) 大学生の脱エリート化

従来の学生と現在の学生を取り巻く状況の中で最も大きな変化の一つとして挙げられるのが就職状況の変化である。旧帝国大学時代の学生というのはいわゆるエリート段階の時代であり、学生は社会からエリート予備軍と認識されある程度の将来は約束されていた。1980年代は大学のレジャーランド化が批判された時代でもあったが、その時代までは学生達は厳しい受験競争を勝ち抜いてきたある種のエリートとしての認識がまだ強く、高度経済成長も相まって大学に進学出来ればそれなりの就職先は確保出来る時代であったと言える。しかし、1990年代から就職氷河期が訪れ学生の就職状況は悪化するようになった。さらに、大学の入試形態の多様化や全入時代の到来により、社会における大学生の受験エリート的なイメージが薄れていき、大学生はもはや特権的な階層では無くなってしまった。つまり、普通に大学に行き、普通に卒業するだけでは就職するのが難しい時代になってしまったと言える。

それでは、現在の学生像や学生を取り巻く状況を踏まえた先行研究にはどのようなものがあるのだろうか。

## 3. 現在の学生像についての先行研究

### 1) アウトサイド・イン、インサイド・アウト

このように、大学生が社会的エリートでは無くなってしまった状況を踏まえた現在の大学生の研究として溝上がアウトサイド・イン、インサイド・アウトという言葉を使って現在の大学生の一面を捉えている<sup>30)</sup>。

アウトサイド・インというのは溝上が青年の生き方の一つを表現した言葉である。その言葉の意味は「外から内へ」という意味であり、「安定した外部の指標により自らの位置づけを決める」生き方を指している。つまり、自分のやりたいことよりも社会が敷いたレールの上に乗りながら、なんとなく社会を乗り切っていこうとする考え方である。これとは逆に自分のやりたいことを優先して生き方を決めていくことをインサイド・アウトという。

このアウトサイド・インの考え方はいわゆる従来の大学レジャーランド時代の生き方の学生が当てはまり、とりあえずは青春を謳歌しながらどこか大きな企業に就職出来れば良いという考え方といえる。しかし、この考え方は社会が複雑になり、さらに不景気による就職氷河期が迫ると衰退していき、変わりに自分のやりたいことを目指すインサイド・アウトの考え方が生まれるようになった。だが、このインサイド・アウトの考え方は自分のやりたいことを目指した結果何処にも就職出来なかったというリスクもあり、完全なインサイド・アウト的な生き方をしていくことも難しい。そのため一部の学校においては未だにアウトサイド・インの生き方も根強く残っている。しかし、新興大学の多くの特徴として専門学校的な側面が強く、特定の職業での技能を身につけるための実践的な教育が中心となっている<sup>31)</sup>。そのため、多くの大学生はある側面ではインサイド・アウト的な生き方を迫られていると考えられる。

## 2) 「学校化」と生き方

上記で示したように新興大学の学生にはいわゆる生徒化した学生と同じ特徴を示した学生が多い。そして、武内らの調査によりそのような大学の特徴として、「学生が少しでも早くやりたいことを見つけ、それに対しての支援をしていく場」として機能している割合が比較的高いことが分かる<sup>32)</sup>。つまり、そこに通う学生に対してインサイド・アウト的な生き方を求めていると考えられる。しかし、溝上が指摘したように自分のやりたいことを優先するインサイド・アウト的な生き方はそれ相応のリスクを伴う。自分のやりたいことを優先した結果それが職業に結びつかないこともあるし、またやりたいことを発見したとしてもそれが非常に狭い視野のものになってしまうがちになる。つまり、学生の中にはそういったアウトサイド・イン的な生き方を望んでいるが、それが出来ないという葛藤にさいなまれている学生がいる可能性があることが溝上の研究から分かる。

## 3) 「自分探し」からの逃走

他にも大学生を含んだ青年論の視点からの先行研究も見えていく。三浦によると1980年代以降の消費社会の中で「男らしさ」や「女らしさ」、「若者らしさ」といった既存の考えやマニュアル化された個性から自由になろうと、「自分らしさ」というのが求められるようになった<sup>33)</sup>。しかし、そのような「自分らしさ」の追求は90年代以降になるとそれは、既存の権力からの脱却ではなく、それ自体が若者達にとって「自分らしさを見つけなければいけない」という一つの圧力になっていることを指摘している<sup>34)</sup>。小杉はフリーターの特徴としてやりたいこと志向と気楽さという二つの側面を持っていることを示している<sup>35)</sup>。そして、浅野はその特徴を若者達が「自分らしさ」の圧力を気楽に生きることで受け流している作法として捉えている<sup>36)</sup>。

もちろん、社会人大学生を除く一般の大学生は現在の若者に当てはまるため、他の若者達と同様に「自分のらしさ」の圧力を受けていると考えられる。先ほど溝上の示したインサイド・アウトの生き方は「自分のやりたいこと」を優先して自らのライフ・スタイルを決定していくという生き方である。つまり、「自分らしい」職業を見つけることを優先していく生き方であり、この点で言えば三浦のいう「自分らしさ」探しの中の延長線上にあると捉えることが出来る。

## おわりに

以上のように、先行研究をもとにして「生徒化」という言葉がどのような定義で使われているか確認し、そこから「生徒化」がどのように論じられてきたかを整理した。その結果、現在の「生徒化」論の多くは「従来の学生像」を前提として議論が行われており、「生徒化」した学生は「従来の学生」になるための条件に達していないという点から「未熟な学生」として扱われていたと考えられる。

しかし、先行研究から「従来の学生像」について整理を行った結果、「生徒化」論を論じている研究者達の捉える学生像も「従来の学生像」の中の一つの側面にしか過ぎないことが分かる。さら

に、学生を取り巻く環境も変化していく中で「従来の学生像」を目指していくことが必要なのかという点にも疑問が残る。

そのため、3章では現在の学生を取り巻く状況を踏まえた上での先行研究の紹介を行った。ここから、分かるということは現在の学生は「自分らしさ」や自分のやりたい職業を選ぶインサイド・アウトのような、「自分の生き方を自分で選択するということ」が一つの圧力になっているということが整理されていた。こうした状況を踏まえると大学生が「生徒化」ということは大学側が敷いたレールに進んで乗っているという点で、「自分で生き方を選択していく圧力」を上手く受け流すための一つの方法と考えられる。

現在の学生を取り巻く状況は、2008年のリーマンショックにより、溝上や三浦、小杉の研究が行われていた時期より就職状況はさらに悪化しているといえる。そのような、状況の中で学生の動きに更なる大きな変化が訪れている可能性がある。また、その点を踏まえた上で今後の検討課題としていきたい。

#### [注]

- 1) 大学レジャーランド時代の詳しい様子は、(新堀通也編『大学生-ダメ論をこえて』(現代のエスプリ 213)、1985年)を参考にされたい。
- 2) 溝上慎一『現代大学生論』NHK出版、2004年、pp.17-19。さらに、調査については以下のホームページを参照した。ベネッセ大学生の学習生活実態調査(4070名の大学生が対象)〈[http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku\\_jittai/hon/index.html](http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/index.html),2010.01.03.〉東京大学大学経営・政策研究センター・全国大学生調査(全国127大学から48233人が対象)〈[http://daikei.p.u-tokyo.ac.jp/index.php?plugin=attach&refer=College%20Student%20Survey&openfile=CSS\\_summary.pdf](http://daikei.p.u-tokyo.ac.jp/index.php?plugin=attach&refer=College%20Student%20Survey&openfile=CSS_summary.pdf),2010.01.03.〉
- 3) 近年の大学生の「生徒化」を論じたものとしては、小杉礼子「大学生の進路選択と就職活動」(『高等教育研究：第11集』2009年、pp.85-105)、武内清「学生文化の実態と大学教育」(『高等教育研究：第11集』2009年、pp.7-21)、堀有喜衣「大学の就職キャリア支援の現状と課題」(小杉礼子編『大学生の就職とキャリア』勁草書房、2007年、pp.51-75)がある。
- 4) 3)の文献を参照。
- 5) 近年の学生のタイプを類型化した例として以下の文献を参照。
  - ・堀有喜衣、前掲3)、p.63。
  - ・溝上慎一「学生主体形成論」京都大学高等教育研究開発推進センター編『大学教育学』培風館、2003年、p.109。
- 6) 岩見和彦・富田英典「現代中学生の意識分析：『生徒化論』の可能性」『関西大学社会学部紀要：14号』1982年、pp.48-97。  
他に子どもの「生徒化」について取り扱った文献として以下のものを参照。
  - ・岩見和彦「教育改革と子ども：学校の社会化機能の再検討」『教育社会学研究：41号』1986年、

pp.67-78。

・佐々木賢『学校非行』1983年、三一書房。

- 7) 同上、p87。
- 8) 同上。
- 9) 伊藤茂樹「大学生は生徒なのか」『駒沢大学教育学研究論』1999年、pp.85-111。
- 10) 伊藤はデータに「学生文化研究会」のものを用いている。詳しくは同上、p109を参照。
- 11) 同上、p104。
- 12) 武内清「学生文化の諸相」武内清編『キャンパスライフの今』玉川大学出版部、2003年、p.169。
- 13) 武内清・浜島幸司・大島真夫「現代大学生の素顔」武内清編『大学生とキャンパスライフ』2005年、上智大学出版、p.315。
- 14) 同上。
- 15) 同上。
- 16) 半澤礼之「大学生の学業適応を捉える視点：「学業における大学生と大学のミスマッチ」と「生徒化」から初期適応を捉える試み」『大学院研究年報：第36号』2007年、pp.112-115。
- 17) 同上。
- 18) 「Fランク大学」とは河合塾による大学の格付けであり通常の合格難易度（A～Eまでの難易度）が付けられない、つまり受験すれば必ず合格する大学のことをさす。詳しくは（葛城浩一、2007、「Fランク大学生の学習に対する志向性」『大学教育学会誌』29:87-92。）を参考にされたい。
- 19) 同上、pp.90-92。
- 20) 大学GPとは各大学が行う、大学改革のための優れた取り組みのことを指す。詳しくは以下のホームページを参照されたい。文部科学省「大学教育の充実 -Good Practice-」  
<[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/gp.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/gp.htm),2010.01.29>
- 21) 「新興大学」とは1960年代以降に創立され、偏差値が40～50以下の大学群のことを指す。詳しくは（武内清・谷田川ルミ・伊藤素江「「新興大学」の学生の生活と意識」『上智大学教育論集：40号』2005年、pp.63-68。）を参考にされたい。
- 22) 武内清・谷田川ルミ・伊藤素江、前掲20)、pp.63-68。
- 23) 張江洋直・浜島幸司「大学教育社会と<自己実現の物語>」『稚内北星学園大学紀要：6号』2006年、pp.82-86。
- 24) 日本では専門学校や短大等でも「学生」という呼称を使うがこの場合は、4年生大学に所属する大学生を指す。
- 25) 伊藤、前掲9)、pp.103-107。
- 26) 浜島幸司「大学生は生徒である。それが何か？」『上智社会学論集：29号』2005年、p.203。
- 27) 溝上慎一『大学生論：戦後大学生の系譜を踏まえて』ナカニシヤ出版、2002年、pp.6-41。
- 28) 潮木守一『京都帝国大学の挑戦』講談社学術文庫、1997年、pp.240-241。
- 29) 溝上、前掲27)、pp.16-17。

- <sup>30)</sup> 溝上、前掲2)、pp.147-159。
- <sup>31)</sup> 武内・谷田川・伊藤、前掲19)、pp.65-66。
- <sup>32)</sup> 同上。
- <sup>33)</sup> 三浦展「消費の物語の喪失と、さまよう『自分らしさ』」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』2005年、勁草書房、pp.108-110。
- <sup>34)</sup> 同上、pp.130-132。
- <sup>35)</sup> 小杉礼子、『フリーターという生き方』2003年、勁草書房、pp.43-44。
- <sup>36)</sup> 浅野智彦「ポスト「労働論」的アイデンティティ論の可能性 解説」浅野智彦編『若者とアイデンティティ』2009年、pp.131-132。